学校だより　7月号
東深沢
令和７年６月３０日
みしまの森学舎
世田谷区立東深沢小学校
校　長　　奥長　英樹

‘探究的な学び’

校長　奥長　英樹

学校において、「探究的な学び」は昔から実践され、子どもたちが自らの興味・関心に基づき本気で課題解決に取り組む姿を見せてくれました。それは、どの教科が、ではなく、どの行事で、でもなく、区別なく色々な場面や学びの中で輝かせる姿でした。昨今この「探究」が声を大に取り沙汰されてきました。社会状況など様々な要因としても、これからの予測不能な未来を生きる力を育てる、という切迫した現実があるからだと思います。どの教科、どの行事、どの領域においても、子どもたち自身の主体的な学びを実現できます。これまでの社会を生きてきた大人が決める「あるべき姿」に向かう学びではなく、子どもが自ら学び、探究し、自分たちの力を高めていく学習を実現するために、どのような学びを生み出していくのか、私たちは常に考え続けなければなりません。

愛媛大学教育学部附属小学校では、「子どもが創る『探究的な学び』をデザインする」という研究テーマで、その理論の構築や実践に取り組んでいます。研究の特色の一つとして、「探究的な学び」に大切な「６つの経験」を「６C」として位置付けました。この「６つの経験」とは、「挑戦【Challenge】」「選択【Choice】」「協働【Collaboration】」「批判的思考【Critical Thinking】」「創造【Creativity】」「メタ認知【Check】」としています。それぞれの頭文字から「６C」と呼んでいるのだそうです。この「６つの経験」を意図的に取り入れ、各教科等で「探究的な学び」の実現を目指し、実践に取り組んで成果を上げられています。

数年前、コロナ禍において、小学校の修学旅行に当たる日光林間学園が中止になってしまった際、その年ある学校の６年生が取り組んだのが、「バーチャル修学旅行」でした。日本各地からそれぞれの興味・関心を生かし選んだその場所に、もし修学旅行に行くならと、その土地の魅力や観光業を調べ、それをまとめてお互いに紹介し合い、「バーチャル修学旅行」を行いました。社会科の歴史と関係して調べたり、文化として紹介できるように演奏をしたり作品を作ったり、様々な情報をまとめたり。教科の枠を超えて取り組み、それで終わりにするのではなく、自分たちでまとめ発表しあったことと共に感謝の気持ちを伝えようと、その土地その場所の観光事務所などに、お礼状と共に学習の成果物を送りました。すると、思いがけず、様々なところからお返事をいただいたのです。しかも、「私たちの町をとりあげていただき、ありがとうございます。」という趣旨のお手紙や、新しいパンフレット、さらにはその町の特産品までが学級に送られてきました。子どもたちも担任もビックリ。人とつながることのできたとても貴重な学びになりました。

探究的な学びは、初めからゴールは決まっていません。子どもたちとともにつくり、学びに向かい、たどり着くところが、その子どもたちにとってのその時点でのゴールです。そこまでの過程：プロセスでは、うまくいくことばかりではなく、失敗も多いかもしれません。しかし、様々な壁にぶつかり、それを乗り越えようと、子どもたち自身が働かせる資質・能力は、未来を生きる力につながるものです。だからこそ、本気のプロセスを、自分ごととしてのプロセスをつくることが、とても大切だと思います。

東深沢小では、子どもの学びの姿から、より良い「探究的な学び」をつくりにはどのようにしたら良いか、を校内研究として取り組み続けています。その取り組みも、それぞれの先生が 、自分ごととして、主体的に取り組んでいます。それが私たち教師の「探究的な学び」と考えています。私たちのゴールは、一つたどりついても次のスタートが待っています。子どもたちと一緒につくる学び、子どもたち自身がつくる学びと同様です。だからこそ、本気のプロセスが大事だと思っています。子どもたちの姿から学ぶように、「探究的な学び」は、形や結果やそのたどりついたところにあるのではなく、本気で取り組むプロセスにあるのだと考えられます。そんなプロセスの積み重ねを大切にしていきたいと思います。